

## 後鳥羽院と平安京周縁地域

——院政の展開と水無瀬殿——

長村 祥知

### 序

本稿の課題は、平安時代後期の院権力が開発した平安京周縁地域と水無瀬殿に即して、後鳥羽院の都市政策を論ずることにある。

日本古代の首都Ⅱ平安京から中世の首都Ⅱ京都への変容の諸相については、都市論のみならず建築史・宗教史などの様々な分野に関わる課題として研究成果が蓄積されている。なかでも政治史の立場から注目されるのは、特に平安時代後期に院権力が開発を主導した平安京周縁地域——具体的には白河院・鳥羽院・後白河院が主導した白河地域・鳥羽院・法住寺殿——についての研究の進展である<sup>①</sup>。

院・摂関家・平家といった権門による都市開発を概念化する研究成果も提示されている。美川圭氏は、荘園制とともに権門が成立し、拠点となる平安京周縁地域の開発が進んだとして、「権門都市」という概念を提示し、宇治・鳥羽院・法住寺殿・六波羅といった権門都市の創出と吸収を経て中世都市京都が成立したとする<sup>②</sup>。また山田邦和氏は、美川氏の権門都市概念に対して、国家公権の体现者でもある治天の君と他権門の差別化が必要であるとして、院が建設を主導した新都市を「院政王権都市」と概念化し、平安後期の白河・鳥羽・後白河の三院が建設した白河・鳥羽院・法住寺殿と、鎌倉中期の後嵯峨院が建設した嵯峨がそれにあたるとした<sup>③</sup>。

これらの研究を踏まえたとき、残された課題となるのが、後白河と後嵯峨の間に位置する後鳥羽院政期の評価である。後鳥羽は治承四年（一一八〇）に生まれ、建久三年（一一九二）に祖父の後白河院が死去したのち親政をしき、建久九年（一一九八）土御門天皇に譲位して院政を開始し、承久三年（一二二二）の承久の乱に敗れ、隠岐に流された。

もちろん従来も後鳥羽に全く言及がないわけではなく、後鳥羽が水無瀬殿に度々赴いたことは周知の通りである。「院政と平安京周縁地域」の視点から後鳥羽に論究したものとして、美川氏は「後鳥羽上皇は、最勝金剛院造営による白河地区の復興、鳥羽院の修理と利用、水無瀬殿の造営などに積極的であったが、いずれも王家の新たな中心となるような権門都市を生み出すようなものではなかった」とする<sup>④</sup>。また山田氏は後鳥羽の水無瀬殿について、院政王権都市へと成長した可能性もないわけではないとする。しかし都市構造が未解明であると断った上で、都市の成熟に一定の歳月が不可欠であることから、ある程度の商業的集積はあったが、都市的発達は成熟にいたらなかったと評価する。その理由として、後鳥羽が複数の京外離宮を併用し、水無瀬殿だけに精力を注ぎ込んだわけではない点を指摘する（注③山田B論文二八九頁以下）。

以上のごとく美川氏・山田氏は水無瀬殿について権門都市・院政王権都市としては否定的評価を示唆するにとどまる。しかし従来は水無瀬殿についての実態説明が不十分であったため、正面から議論する研究段階

に至っていないかったというのが実情であろう。今日では、古代の河陽離宮からの展開が検討されているほか、豊田裕章氏が精力的に研究を重ね、水無瀬殿（氏は「水無瀬離宮」という呼称も併用する）の空間構造の復元や時期区分、選地思想を提示していることが注目される。<sup>⑥</sup>

また、水無瀬殿の評価とは別に本稿が重視したいのは、美川氏・山田氏も指摘する、後鳥羽が白河地域や鳥羽殿を復興・修理して複数の京外離宮を併用していたとする点である。加えて後鳥羽院政期には、院近臣を費用負担者として、洛中を含む諸所の院御所の造営が度重なったことも指摘されている。<sup>⑦</sup> 後鳥羽が前代の院に勝るとも劣らない財力・求心力を有しながら、前代の院とは財や御所の使途が異なるとすれば、それは都市政策が異なっていたことの表れであろう。その内実を説明することは、中世都市京都が成立する過程に果たした院権力の主導性を重視する従来の研究視角からも改めて追求すべき課題となるはずである。この課題は、十二世紀までに開発・建設された権門都市・院政王権都市が「その後どうなったのか」の研究が従来は十分ではないという課題にも通底する。<sup>⑧</sup>

かつて不十分だった後鳥羽院の研究も今日では進展し、多芸多能・諸道興隆の帝王としての再評価が試みられ、<sup>⑨</sup> 彼が直面した政治課題と儀礼の関わりや詳細な年譜も公刊された。<sup>⑩</sup> 院政の展開史上においても、平安後期の院や鎌倉中後期の院との連続性や段階差が解明されつつある。<sup>⑪</sup> 後鳥羽院政論としても、平安京周縁地域に対する都市政策の解明は重要課題と位置付けられよう。後鳥羽といえは承久の乱の敗北という結末が目立つが、従来の院に比して京の治安は安定しており、貴族社会に君臨した院権力という点でも相当に強大であったことを看過してはならない。また水無瀬は、他の権門都市・院政王権都市に比してはるかに洛中から離れており、その意味も合わせ考えるべきであろう。

以上の関心からなる本論に先立ち、平安後期の白河院・鳥羽院・後白河院が開発した平安京周縁地域の特徴を確認しておく。<sup>⑫</sup>

白河院・鳥羽院が開発したのが白河地域と鳥羽殿である。白河地域には、白河天皇の勅願によって建立された法勝寺をはじめ、白河・鳥羽院政期にいわゆる六勝寺が建立された。法勝寺には八角九重塔が建立され、国家的法会たる北京三会の一つ法勝寺大乘会が創始された。一方、鳥羽殿は、白河・鳥羽院政期に院の家政の拠点として用いられ、勝光明院宝蔵も造営された。また鳥羽殿には、白河院の成菩提院陵、鳥羽院の安楽寿院（本御塔）陵、近衛天皇の安楽寿院南（新御塔）陵が設置され、天皇家の墓所という性格が生じていた。

しかし後白河院は、白河地域と鳥羽殿を主要拠点としては用いず、新たに六波羅に近接する法住寺殿を形成し、そこに蓮華王院宝蔵を設け、自身と建春門院の墓をも設けた。

以下では、如上の平安後期に開発された白河地域・鳥羽殿・法住寺殿の「その後」を意識して後鳥羽の都市政策を考えることとしたい。

## 1 後鳥羽院と白河地域

後鳥羽は白河地域の開発を再び進めた。

承元元年（一一〇七）七月廿八日、後鳥羽は、五辻殿から壊ち渡した白河泉殿（「白河新御所」「押小路新御所」）に移徙した（『大日本史料』四編九冊七五〇頁以下）。

さらに同年十一月廿七日には白河新御堂御所に移徙して（『大日本史料』四編九冊八二九頁以下）、同廿九日には「新御堂供養（号最勝四天王院）」を行っている（『仲資王記』）。最勝四天王院と称されたこの御所には、障子和歌四百六十首と名所絵四十六が貼られており、後鳥羽による国土支

配の象徴といえる<sup>13</sup>。翌承元二年三月廿八日には「最勝四天王院内薬師堂供養」も行われた(『百練抄』)。

また平安後期における院政の象徴的建造物であった法勝寺九重塔が承元二年(一二〇八)五月十五日に雷で焼失したが、後鳥羽はその再建に着手し、建暦三年(一二二二)四月廿六日に法勝寺九重塔供養を行い、多数の武士を警固に動員している(『明月記』)。

後鳥羽は白河地域の宗教的機能を強化し、そこに多数の武士を動員するという、宗教と武力の掌握者であることを表現する空間として再建したのである<sup>14</sup>。

ただし後鳥羽は、承久二年(一二二〇)十月には最勝四天王院を壊ちて五辻殿に移築している<sup>15</sup>。その意味については後に検討することとしたい。

## 2 後鳥羽院と鳥羽殿

鳥羽殿についても後鳥羽は、建仁元年(一二〇一)、建永元年(一二〇六)、建保元年(一二二三)の三度、御所を造営している。鳥羽殿では武芸や武力との関わりが注目される。

院が主催する鳥羽の城南寺祭は白河院政期に始まり、鳥羽院政期には北面の武士が射手となる流鏑馬が確認できるようになる<sup>16</sup>。しかし城南寺祭は後白河院政期に衰退し、軍事儀礼を含む院御所の鎮守祭という役割は、法住寺殿の至近に位置する新日吉社の小五月会に移った<sup>17</sup>。後鳥羽は、後白河に引き続き新日吉社小五月会を主催するとともに、一方で鳥羽の城南寺でも競馬や笠懸・小弓といった武芸を楽しんだ<sup>18</sup>。承久三年(一二二二)四月下旬、後鳥羽が承久の乱の初発となる伊賀光季追討のために軍勢を集めた名目も城南寺の行事であった<sup>19</sup>。「武の空間」という鳥羽殿の性格を後鳥羽は回復したのである。

また、鳥羽殿に設置された「御厩」は治天の馬政の拠点であり、鳥羽院政期以降、院御厩別当は左馬寮知行者と一体の政治勢力であることが多く、その場合には鳥羽殿の管理を担っていたと考えられる<sup>20</sup>。

院御厩別当には、鳥羽院政期から最大級の在京武力保持者の在任が目立つようになり、鳥羽院政期には藤原家成・平忠盛・清盛がつとめていたが、保元三年(一一五八)八月の後白河院政開始時には院の寵臣の藤原信頼が補任される。信頼が平治の乱(一一五九)で討たれたのちは、平清盛・重盛・宗盛が連続し、治承三年(一一七九)十一月政変後の高倉院御厩別当は平知盛がつとめた。平家が擁立した高倉院が治承五年(一一八二)正月に没した後は、院近臣藤原朝方が院御厩別当に在任したらしいが、寿永二年(一一八三)十一月の法住寺合戦後には木曾義仲が就任している。義仲が翌年正月に鎌倉幕府軍に討たれたのち、後白河は元暦二年(一一八五)四月に源義経を院御厩別当に補任するが、同年十一月には義経も源頼朝との関係悪化により京を離れることとなり、北条時政が頼朝の代官として院御厩を一時領したのち、同年十二月の廟堂改革でようやく藤原朝方が別当に復し、のちに鎌倉幕府の京都守護でもある一条能保が補任された。

かかる政治情勢に伴って後白河による鳥羽殿の掌握が不十分だったことも、後白河が法住寺殿に様々な機能を集約したことの一前提であろう。後鳥羽は、建久十年(一一九九)の三左衛門事件を機に西園寺公経の院御厩別当を解任し、自身の祖父である坊門信清を補任した。信清は鎌倉殿源実朝の舅となり、のちには信清の男坊門忠信が院御厩別当をつとめる。後鳥羽は彼等を介して鳥羽殿を掌握していたのである。

以上のごとく、鳥羽殿の「武」という点で、白河院・鳥羽院の創始・掌握、後白河院の後退、後鳥羽による回復という段階差が見出せる。ただし後鳥羽も、かつての白河院・鳥羽院ほどには鳥羽殿を重視せず、淀

川流域の拠点としては水無瀬殿をより重視している。

### 3 後鳥羽院と法住寺殿・六波羅

法住寺殿は寿永二年（一一八三）十一月に木曾義仲の攻撃によって焼失した。翌年正月に義仲が鎌倉幕府軍に討たれると、後白河は鎌倉幕府が保護する六条殿へ移った。後白河が六条殿に設けた持仏堂は長講堂となり、建久三年（一一九二）の後白河の没後、後白河の追善供養である長講堂御八講が修される。六条殿は、後白河の女である宣陽門院観子や、観子が養子とした雅成親王の御所として利用され、後鳥羽が御所として用いることはなかった。一方、法住寺殿（「東山南殿」）は、建久二年（一一九二）に源頼朝が修造し、御所として利用できるようになっていたが（『玉葉』十二月十六日条）、ここも後鳥羽が御所として用いることはなかった。

以上からすれば、後鳥羽は法住寺殿を院御所としては放棄したといえる。ただし、法住寺殿至近の新日吉社で開催される小五月会は、後白河が没する前年の建久二年（一一九二）六月五日に開催されたのちは中絶していたが、後鳥羽が院政を開始した正治元年（一一九八）の五月九日に再興し、以後毎年開催している。後鳥羽は、後白河の法住寺殿を全く否定したというわけではなく、最小限の機能を残して維持したのである。

なお、後鳥羽院政期には、六波羅・法住寺殿のさらに外縁部で栄西や俊芿といった入宋僧が建仁寺・泉涌寺を創建し、持律持戒の僧による宋式の寺院生活が実践された<sup>21)</sup>。後鳥羽が積極的にそれらを誘致したわけではないが、これらの新たな宗教施設への認可は、法住寺殿を院御所として充実させないという判断の延長上にあつたと考えられる。

ところで、後白河の法住寺殿は、平家の六波羅と近接していた。保元・平治の乱で院の北面となる京武者の多くが滅亡し、平家が在京武力の保

持者として突出した立場となるなかで、後白河が軍事的に平家に依存していたことがこの空間配置に表れている。かかる後白河と平家の空間の近さを考えたとき、内乱後の院の身体と武力の距離にも注目する必要がある。

六波羅は、「平家の六波羅」から「鎌倉幕府の六波羅」へと変化するが、鎌倉前期に武家集住地という性格は弱かったようである。六波羅には、頼朝上洛時の宿所として用いられ、一条高能が「留守」として居住した六波羅邸があつたが、建仁三年（一一三三）十月廿九日に焼亡した（『明月記』）。京都守護の北条時政・時定と中原親能の宿所は六波羅にあつたと考えられるが、それ以外の京都守護の六波羅居住は確認できず、御家人も集住してはいなかったと考えられている（注<sup>22)</sup>高橋論文）。

一一八〇年代の内乱の余韻で一一九〇年代には在京する武士自体が少なかったが、一二〇〇年代になってようやく鎌倉幕府の御家人在京奨励政策が実体化し、京の治安が改善した（注<sup>20)</sup>長村論文）。一二〇〇年代に院政をしいた後鳥羽は、在京武士個人々々に対する組織・動員が可能であり、武家集住地に隣接・依存する必要性が低かつたのである。

後鳥羽院政期の小五月会に勤仕したのは、後鳥羽と主従関係にある北面・西面・隨身といった、鎌倉幕府に限定されない多様な武士であり、御家人は少なかった<sup>23)</sup>。強訴防禦などの軍事的主力は在京の御家人が占めたが、武芸の担い手として御家人以外の武士も存在し、後鳥羽の判断で彼等を起用することができたのである。

### 4 後鳥羽院と水無瀬殿

以上のごとく、後鳥羽は、白河地域に御所や宗教施設を新造し、鳥羽殿を掌握して武芸の場という機能を復興し、法住寺殿至近で開催される

新日吉社小五月会を維持した。御所の造営という点に限れば、後鳥羽の政策は後白河に比して白河・鳥羽に類似する面が強いが、後鳥羽は新たに水無瀬殿を重視しており、白河・鳥羽への回帰とはいえない。すなわち後鳥羽は、前代の院の権門都市・院政王権都市を否定せず、しかし特定の院の路線を継承することもなく、複数の平安京周縁地域を多角的に経営していたのである。

次に、後鳥羽が独自に重視した水無瀬殿の特徴を確認しておきたい。豊田裕章氏は、水無瀬殿の時期区分として次の三段階を提示している。

- 第一期 正治二年（一一〇〇）源通親の山荘  
 第二期 元久二年（一一〇五）八月十三日に移徙した御所  
 第三期 建保五年（一一二七）正月十日に移徙した「新御所」（南御所）と、

二月の「山上」「新御所」の造営<sup>26</sup>

第一期は、後鳥羽院政が始まって間もなくの時期にあたり、初期には源通親が院政を主導していた。後鳥羽と水無瀬の関わりが確認できる最初の史料は、『玉葉』正治二年（一一〇〇）正月十二日条の記事「此日、上皇為<sup>27</sup>御方違<sup>28</sup>、幸<sup>29</sup>山崎<sup>30</sup>内大臣別業<sup>31</sup>」である。この通親の別業を『明月記』正月十二日条は「皆瀬御所」とする。水無瀬の御所造営も当初は源通親が主導していたと考えられるが、やがて建仁二年（一一〇二）十月に通親は没する。

源通親の没後は後鳥羽が自発的に水無瀬殿の開発を進めた。後鳥羽は遠方にもたびたび御幸し、淀川北岸の水無瀬殿から摂津の四天王寺や、淀川南岸の渚院・片野（交野）に赴いている。水無瀬殿そのものへの関心に加えて、より遠方への御幸や遊興の中継地点としても水無瀬殿を利用していただのである。

第三期にあたる建保五年（一一二七）の開発は次の史料に記される。

史料1 『明月記』建保五年（一一二七）二月廿四日条

或者語云、河陽上下公私土木之營、所<sup>レ</sup>分給地、面々経営、被<sup>レ</sup>移<sup>二</sup>魚市<sup>一</sup>、上下故有<sup>二</sup>商賈之營<sup>一</sup>。垂<sup>レ</sup>相被<sup>レ</sup>造<sup>二</sup>營新御所<sup>一</sup>、山上有<sup>レ</sup>池。池之上被<sup>レ</sup>構<sup>二</sup>澗<sup>一</sup>、塞<sup>レ</sup>河堀<sup>レ</sup>山、一兩日引<sup>レ</sup>水。又件澗為<sup>レ</sup>立<sup>二</sup>大石<sup>一</sup>、兼遣<sup>二</sup>取材木<sup>一</sup>。為<sup>レ</sup>引<sup>レ</sup>石<sup>云々</sup>。国家之費只在<sup>二</sup>此事<sup>一</sup>歟。

ここでは、山上に新御所を造営するなど、水無瀬殿の開発を進めていることに加えて、魚市の移設が目目される。大村拓生氏は、鳥羽殿の成立に伴う古代の山崎の地位低下により鳥羽・淀が浮上したとし、淀魚市の成立は白河院政期に遡るかとしている。この魚市を後鳥羽は「河陽」すなわち水無瀬に移設した。後鳥羽は、白河・鳥羽院政期に淀川流通の重要拠点として整備された鳥羽殿の機能を、水無瀬殿に吸引しようとしたのである。

このことは、水無瀬殿の面期というにとどまらず、後鳥羽の都市政策が大きく変化する第一歩と位置付けられる。既述の通り承久二年（一一二〇）十月には、白河地域の最勝四天王院を壊ちて五辻殿に移築している。すなわち、この数年の間に、白河院・鳥羽院が開発した鳥羽殿や白河地域の機能低下が決断されているのである。前代の院が開発した複数の平安京周縁地域を多角的に経営するという後鳥羽の都市政策は、建保五年（一一二七）頃から水無瀬殿の機能を重点化するように変化したのである。

## 結

平安時代後期、白河院・鳥羽院は白河地域と鳥羽殿を開発したが、後白河院はそれらを重視せず、新たに法住寺殿を開発した。後白河院は、合戦・内乱が継起する政治情勢のなかで、「武の空間」という性格を持つ鳥羽殿の掌握が不十分であり、平家や鎌倉幕府との近さを維持する必要

もあつた。

その後をうけた後鳥羽院は、前代の院の都市を否定せず、しかし特定の院の路線を継承するということもなく、水無瀬殿を加えて、複数の平安京周縁地域を多角的に経営した。その背景として、後白河院政期に比して後鳥羽の権力が強大で京都の政治情勢が安定していた点があげられる。内乱期に平家が安徳天皇を伴って西走したため、後鳥羽は幼くして践祚し、後白河の後継者として膨大な天皇家領を継承し、院政をしくことを予定して成長した。院政の主として、近衛家・九条家など上級貴族の勢力均衡策による貴族社会の統制に成功し、京では後鳥羽に対抗できる権門が不在となった。鎌倉の源実朝に対する優位のもとで良好な関係を築き、在京武士の組織・動員による京の治安の安定を回復した。後白河とは異なり、特定地域「のみ」を拠点とする必要性がなくなった結果、後鳥羽は前代以来の複数の平安京周縁地域を維持し、さらにその外部まで権力を及ぼす余裕があり、水無瀬殿を開発したのである。こうした都市政策は前代の院とは異なる独自の路線であつた。

やがてこうした都市政策にも変化が表れる。すなわち、建保五年(一一二七)二月の鳥羽殿から水無瀬殿への魚市の移設、そして承久二年(一一三〇)十月の白河から五辻殿への最勝四天王院の移築である。前代の院が開発した複数の平安京周縁地域を多角的に経営するという後鳥羽の都市政策は、水無瀬殿に集約されたのである。

承久の乱に敗れたこと、そしてその後数年の史料が僅少なため、後鳥羽の真意には未詳の点も残り、彼の構想がどこまで実現したかも検討の余地がある。ただし、後鳥羽が初めて水無瀬殿に赴いてから二十年間の都市としての蓄積に加えて、建保五年以降は鳥羽殿や白河地域に割かれていた都市の開発・維持の資源がここに集約されたことを勘案すれば、水無瀬殿もまた、権門都市・院政王権都市の系譜に位置付けてよいと考え

えられる。本稿では検討できなかったが、今後は、洛中御所や承久元年に消失した大内裏の再建とあわせて、後鳥羽の都市政策の解明を進めてゆきたい。

承久三年(一一三二)四月の順徳から仲恭への天皇交代、そして同年五月の伊賀光季・北条義時の追討へと、後鳥羽の大きかりな「政治」が具体化する。しかし後鳥羽は承久の乱に敗れ、隠岐に流された。その後、後鳥羽は京に帰ることなく、暦仁二年(一一三九)二月廿二日、隠岐で没した。世を去る直前の後鳥羽が水無瀬信成にあてた書状には、次のように記される。

史料2 暦仁二年(一一三九)二月十日「後鳥羽上皇書状案」(三条西家文書。『鎌倉遺文』八一五三―八三)

……大方いつそやも仰られし様に、時を失たる身にて、在洛返々あしき事也。いつも只水無瀬に居住して、我後生を訪はん外、又他事あるへからず。ゆめくをこたる事なかれ。所詮我子孫の治天にあらずハ、信成・親成か後葉、二たひ朝廷に不可仕よし存也。なかく此分を心得て、子孫にも申置へきなり。けに術尽事ハいくたひも、只鎌倉へ歎いふへき也。よもなをさりの計ハせしと覚ゆるぞ、信成みな存知したる様に、水無瀬をハ、昔より我ふかく心をとめたる所也。今親成に仰られ置も其故也。相構て人にけあらされず、あさまならぬ様にてあるへき也。鎌倉より地頭をものけ、……

後鳥羽は水無瀬信成・親成の子孫に水無瀬で自身の後生を弔うことを望んでいた。白河・鳥羽が墓所とした鳥羽殿や後白河が墓所とした法住寺殿の先例を踏まえれば、後鳥羽は水無瀬に墓所を置くことを希望していたと考えられる。しかし後鳥羽に自らの墓所の地を決める権限はなく、隠岐で火葬されたのち、遺骨は山城国大原へ移され、そこに建立された法華堂に納骨されることとなった。

注(副題は基本的に省略したが、一部のものについては残した)

- ① 数多くの成果のなかでも、高橋昌明編『院政期の内裏・大内裏と院御所』(文理閣、二〇〇六年)が研究水準を示す論集として注目される。
  - ② 美川圭A「鳥羽殿の成立」(上横手雅敬編『中世公武権力の構造と展開』吉川弘文館、二〇〇一年)。美川圭B「中世成立期の京都」(『日本史研究』四七六、二〇〇二年)。美川圭C「京・白河・鳥羽」(元木泰雄編『日本の時代史 七 院政の展開と内乱』吉川弘文館、二〇〇二年)。美川圭D「鳥羽殿と院政」(注①高橋編書、二〇〇六年)。美川圭E「院政期の京都と白河・鳥羽」(西山良平・鈴木久男編『古代の都 三 恒久の都 平安京』吉川弘文館、二〇一〇年)。
- なお、美川氏の「権門都市」論を理解する際に、美川B論考では荘園制との関わりや平安後期の京周縁に特有という論点が提示されていたが、美川E論考ではそれらの主張が弱まっている点、注意を要する。筆者が本稿の原形となる「院政の展開と水無瀬」を口頭報告した平安京・京都研究会(後鳥羽院の権門都市 水無瀬)(於大山崎ふるさとセンター、二〇一八年九月十六日)の討論の際の美川氏の発言によれば、「今はもう少しゆるく考えている」とのことであった。
- ③ 山田邦和A「中世都市京都の変容」(同『京都市史の研究』吉川弘文館、二〇〇九年。初出一九九八年)。山田邦和B「院政王権都市嵯峨の成立と展開」(同『日本中世の首都と王権都市』文理閣、二〇一二年。初出二〇〇五・二〇〇七年)。
  - ④ 注②美川E論文二〇九頁。なお美川氏が「最勝金剛院」とするのは、最勝四天王院の誤記かと思われる。
  - ⑤ 大山崎町歴史資料館(福島克彦執筆)『河陽離宮と水無瀬離宮』二〇一五年。
  - ⑥ 比較的最近のもので豊田氏自身の既刊論文の成果を詳細に踏まえた論考として、豊田裕章「水無瀬殿(水無瀬離宮)の都市史ならびに庭園史的意義」(『中世庭園の研究』奈良文化財研究所、二〇一六年)、豊田裕章「後鳥羽上皇の水無瀬離宮(水無瀬殿)の構造とその選地設計思想について」(武田時昌・麥文彪編『天と地の科学』京都大学人文科学研究所、二〇一九

年)等がある。以下、豊田氏の見解は上記による。また、政治制度を視野に入れた空間論として、豊田裕章「後鳥羽上皇の水無瀬殿(水無瀬離宮)における政務の裁定について」(『古代文化』七一―四、二〇二〇年)がある。

- ⑦ 『仙洞御移徙部類記』所収『三中記』承元二年(二二〇八)七月十九日条。上横手雅敬「幕府と京都」(同『鎌倉時代政治史研究』吉川弘文館、一九九一年。初出一九七一年)。赤羽洋輔「後鳥羽院の御所について」(『政治経済史学』一六五、一九八〇年)。
- ⑧ 十二世紀における摂関家の権門都市としての性格が指摘されている宇治についても、「その後」の研究は不十分だが、長村祥知「後白河院・後鳥羽院の政治と文化」(宇治市源氏物語ミュージアム編『光源氏に迫る』吉川弘文館、二〇二二年)で、保元の乱後から十三世紀前半までは後白河院・後鳥羽院が主導して院・摂関家が断続的に宇治に関与していたという見通しを述べた。
- ⑨ 個別の芸能に後鳥羽を位置付けた論稿は多いが、後鳥羽の芸能の全体像を論じたものとして、目崎徳衛『史伝後鳥羽院』(吉川弘文館、二〇〇一年)、辻浩和「後鳥羽と〈遊女〉」(同『中世の〈遊女〉』京都大学学術出版会、二〇一七年。初出二〇〇七・二〇〇八年)が重要である。
- ⑩ 谷昇「後鳥羽院政の展開と儀礼」(思文閣出版、二〇一〇年)。長村祥知「書評 谷昇著『後鳥羽院政の展開と儀礼』」(『古文書研究』七三、二〇一二年)も参照。
- ⑪ 白井克浩「鎌倉期公家政治機構の形成と展開」(『ヒストリア』一五八、一九九八年)。白根靖大「中世の王朝社会と院政」(吉川弘文館、二〇〇〇年)。美川圭「院政 増補版」中公新書、二〇二一年。原版二〇〇六年)。長村祥知「中世公武関係と承久の乱」(吉川弘文館、二〇一五年)等。
- ⑫ 注①『院政期の内裏・大内裏と院御所』所収の川本重雄「続法住寺殿の研究」、上村和直「法住寺殿の考古学的検討」、山田邦和「後白河天皇陵と法住寺殿」、野口実「法住寺殿成立の前提としての六波羅」、高橋一樹「六条殿長講堂の機能と荘園群編成」、上島亨「六勝寺」の成立とその歴史的意義、堀内明博「白河街区における地割とその歴史の変遷」、美川圭「鳥羽殿と院政」(注②美川D論文)、大村拓生「鳥羽殿と交通」、前田義明「鳥

羽離宮跡の発掘調査」と、土橋誠「白河・鳥羽」（佐藤信編『古代史講義「宮都篇」ちくま新書、二〇二〇年）を参照したが、繁雑となるため以下では一々の注記は省略する。

⑬ 渡邊裕美子「後鳥羽院関連名所絵」（同『新古今時代の表現方法』笠間書院、二〇一〇年。初出一九九六年）。吉野朋美「後鳥羽院御所の空間的特質（二）―最勝四天王院をめぐる―」（同『後鳥羽院とその時代』笠間書院、二〇一五年。初出一九九六年）。

⑭ 後鳥羽は、法勝寺執行の章玄が承元二年（一二〇八）に没した後、近臣僧の尊長を執行に補任している（『明月記』五月十八日条）。建保三年（一二二五）五月「後鳥羽上皇逆修進物注文写」（伏見宮記録利五八。『鎌倉遺文』四―二二六二）によれば、尊長はさらに蓮華王院（法住寺殿に所在・歓喜光院（白河に所在）・最勝四天王院の執行でもあった。遠藤基郎「天皇家御願寺の執行・三綱」（同『中世王権と王朝儀礼』東京大学出版会、二〇〇八年。初出二〇〇五年）は、執行がそれら寺院の仏寺運営や荘園管理などの実質的な経営責任者であったことを指摘している。このことを踏まえれば、後鳥羽は、平安京周縁地域の宗教施設をとりまとめる存在として尊長を重視していたと考えられよう。

⑮ 『百練抄』承久元年七月十九日条に「最勝四天王院、自白川被渡御五辻殿事始也」とあり、承久二年十月十八日条に「最勝四天王院上棟云々」とある。『門葉記』には承久二年十月四日のこととして「最勝四天王院被壊之」とある。『大日本史料』四編十五冊一七二頁。

⑯ 鶴田泉「流鏑馬行事の成立」（『お茶の水女子大学人文科学紀要』四〇、一九八七年）。横澤大典「白河・鳥羽院政期における京都の軍事警察制度」（『古代文化』五四―一二、二〇〇二年）。

⑰ 注⑯鶴田論文。齋藤拓海「城南寺祭の基礎的考察」（『九州史学』一五五、二〇一〇年）。

⑱ 『猪隈関白記』建仁二年（一二〇二）三月廿四日条。『明月記』建永元年（一二〇六）八月五日条・承元元年（一二〇七）四月六日条。

⑲ 慈光寺本『承久記』は仏事守護のためとし、流布本『承久記』は流鏑馬のためとする。

⑳ 大村拓生「鳥羽と鳥羽殿」（同『中世京都首都論』吉川弘文館、二〇〇六

年。初出二〇〇〇年）は、鎌倉時代中期の西園寺家との類似から、平安後期には平家が鳥羽殿を管理したとする。長村祥知「中世前期の在京武力と公武権力」（『日本史研究』六六六、二〇一八年）では、鳥羽院政期の藤原家成、後白河院政期の藤原信頼二条家、後鳥羽院政期の坊門家についても同様の可能性があることを論じた。以下の院御厩別当の在任状況は拙稿参照。

㉑ 西谷功「承久の乱前後における宋文化のひろがり」と京洛東山」（京都文化博物館企画・編集〈長村祥知編〉『よみがえる承久の乱』京都文化博物館・読売新聞社、二〇二一年）。

建仁寺は建仁二年（一二〇二）建立。泉涌寺は、承久元年（一二一九）十月に俊仍が執筆した「勸縁疏」が翌年二月に後鳥羽に献上され、後鳥羽はその趣旨に賛同して資材を奉加し、伽藍は承久の乱をはさんで嘉禄二年（一二二六）に完成した。西谷功「37泉涌寺勸縁疏写」（前掲『よみがえる承久の乱』参照）。

㉒ 高橋慎一郎「武家地」六波羅の成立」（同『中世の都市と武士』吉川弘文館、一九九六年。一九九一年）三八頁が「平氏の六波羅」は「幕府の六波羅」に移行し」としていることに学び、表現を私に少し改めた。

㉓ 長村祥知「後鳥羽院政期の在京武士と院権力」（同『中世公武関係と承久の乱』吉川弘文館、二〇一五年。初出二〇〇八年）。

㉔ 木村英一「新日吉社小五月会と院・鎌倉幕府」（同『鎌倉時代公武関係と六波羅探題』清文堂出版、二〇一六年。初出二〇一一年）。

㉕ 『明月記』正月十日条・二月八日条・二月九日条・二月二十四日条。

㉖ 後鳥羽の淀川流域での遊興や移動は、「淀川流域関係史料集Ⅱ」（『新修摂津市史 史料と研究』四、二〇一九年）に特徴的な史料が収録される。

その解説として、曾我部愛「中世初期淀川流域の動向と寺社参詣」（『新修摂津市史 史料と研究』四、二〇一九年）参照。

㉗ 『明月記』元久元年（一二〇四）二月廿三日条。

㉘ 『明月記』建仁三年（一二〇三）五月十四日条（A）。『明月記』建仁三年八月廿六日条（B）。『明月記』建仁三年十月十日条（C）。『明月記』元久二年（一二〇五）四月廿七日条（D）。『明月記』元久二年五月廿七日条（E）。片野は狩や遊覧を楽しむ場で（A・E）、渚院には宿泊できる施設



があった(D・E)。

②9 大村拓生「淀と淀川交通」(同『中世京都首都論』吉川弘文館、二〇〇六年。初出二〇〇〇・二〇〇二年)。

③0 注⑦上横手論文、佐伯智広「中世貴族社会における家格の成立」(上横

手雅敬編『鎌倉時代の権力と制度』思文閣出版、二〇〇八年)。

〔付記〕本稿は公益財団法人高梨学術奨励基金による成果の一部である

(富山大学人文学部講師)